

J P S  
北九州

報 協 会  
日 本 郵 趣 協 会  
北 九 州 支 部  
平 成 30 年 7 月 14 日  
第 340 号

新 昭 和

第 一 次

30 銭 五 重 塔 1946.8.10 発 行

数字は、銘版寸法・銘版印面間・中央ガッター寸法  
記号は、大村公作氏による分類

タイプ I  
三層  
飾りに小点あり

日本国長銘版

白紙

灰白紙



i 8 版 22.7mm/3.2mm/2.8mm



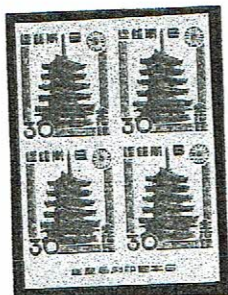
iii α 版 22.5mm/3.4mm/2.8mm  
P os.95 「3」に突起



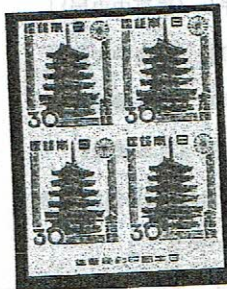
iii β 版 22.5mm/3.2mm/2.8mm  
P os.96 「日」に欠損

3

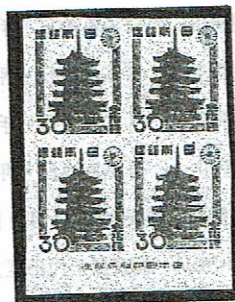
灰白紙・狭通し



iii α B 版 22.7mm/3.3mm/2.8mm  
銘版「日」4箇欠損



iii α 版 22.5mm/3.6mm/2.8mm  
P os.95 「3」に突起



iv α 版 22.4mm/2.8mm/2.8mm  
右下がり銘

提 供 : 橋 本 たねひろ 氏

## 第一次新昭和切手30銭の収集

橋本たねひろ

無目打無糊のタイプⅠを紙質別に銘版でまとめたリーフである。

この切手には狭透かしが多いものの、白紙、灰白紙正透かし共収集に苦労はないので、定常変種による違いとして楽しめばよいと考えている。

ごらんとおり、刷色違いは分類していないので、将来の課題である。

見出しに「日本国長銘版」としているのは、短銘版が存在するからであるが、当初は考える必要がない。

それよりは、無目打糊有り（タイプⅠのみ存在する）と無目打無糊のタイプⅡの入手に努力すべきである。

タイプⅡはタイプⅠより少ないようであるが、それでも相当数市場にあり、安価のため業者でも分類していないこともあるので、貼り込み帳から探す楽しみがある。

さて、表紙のリーフでは、版別の分類をしているが、大村公作氏の研究により少しづつ明らかになっているものであり、まだまだ新発見の余地がある分野である。

一次二次新昭和切手を通じて言えることであるが、印刷局の製造が不十分なことから、複数の民間の印刷工場にも発注したため、業者ごとに版が異なっていることが、このシリーズを面白くしている。

次回は1円「北斎の富士」を予定している。